336 昇圧化学療法時の腫瘍血流量の核医学的評価

中島鉄夫，外山貴士，小鳥輝男，周藤裕二，岩崎俊子，木村浩彦．徳田康孝，林　信成，松田　豪，松下照雄，石井　靖，＊鳥塚莞爾（福井医大放射線科，＊学長）

目的：アンギオテンシンーII（以下A-II）注入下の昇圧化学療法時の腫瘍血流の変化を，Kr-81mを用いて核医学的に検討した。

症例および方法：症例は２例の肝転移と１例の仙骨転移である（原発：胃，結腸）。全例腫瘍の栄養動脈に，動脈内留置カテーテルを挿入，このカテーテルよりKr-81mあるいはTc-99m-MAAとA-IIを平行して注入した。

結果：全例において腫瘍血流はA-II注入に伴って増加したが，化学療法後の筋炎や，慢性胆嚢炎が存在する症例では炎症病巣への血流にも増加が見られた。

結語：昇圧化学療法時には炎症病巣への抗がん剤の集積増加も考慮に入れる必要がある。

337 ^{67}Ｇａ-SPECT画像とＸ線ＣＴ画像との合成画像による有用性の検討

竹田芳弘，中川富夫，佐藤伸夫，黒田昌宏，清水光春，河野良寛，平木祥夫（岡山大学放射線科）　永谷伊佐雄（岡山大学核医学診療室）

われわれは，^{67}Ｇａシンチplanar像で異常集積がみられた症例に対してSPECTを施行し，ついでSPECT画像での異常集積部位と同一面においてＸ線ＣＴを撮像し，このデータをＭＴを介して Scintipac-2400 に入れ，合成画像を作成し，その有用性について検討した．またファントームを用いて合成画像の一致の確認，濃度 levelおよび，back ground の影響についても合わせて検討した．合成画像は異常集積部位の局在診断や拡がりの描出に優れ，詳細な情報をより客観的に得ることが可能であり，臨床上，有用な検査方法であると思われた．

338 強皮症患者肺線維症のConventional法による^{67}Ｇａシンチグラフィーの定量的評価

三重大　放　　秦　良行、中村和義、田中秀虎
大井　牧、中川　毅、

強皮症患者18例について、肺線維症の炎症性活動を評価するため、^{67}Ｇａを用いて肺野ガリウム集積の定量的測定を試みた。方法は、Maceyの方法によりConventional法で求めた胸部前後像を相乗平均し、トランスミッションデータで補正して肺野ガリウムの集積率を求め、また同時にSPECTを併用しConventional法とSPECT法を比較した。SPECT法は吸収補正されていないが、Conventional法とSPECT法に大きな相違があり、この原因をSPECT像で検討したところ、胸壁、特に肋骨への集積がConventional法での肺集積に大きな影響を与えていた。軽度のガリウム肺集積を評価するには、Conventional法では限界があると考えられた。

339 急性化膿性関節炎の骨スキャン，Ｇａスキャンの臨床的検討

上野恭一，笠間　純，坂下裕紀，松田紀子
（石川県立中央病院　放射線科，中放）

抗生物質の発達にともない　近年急性化膿性関節炎が見られることは少なく　核医学検査のまとまった報告例も少ない．我々は1984年4月から　1989年4月までに当院にて経験した化膿性関節炎の骨シンチグラフィ，Gaシンチグラフィを retrospectiveに検討したので報告する．小児２例，成人５例（男６例，女１例）で，化膿性仙腸関節炎３例，多発性化膿性関節炎３例，化膿性股関節炎１例，計７例である．Ｇａシンチが　最もsensitiveで，骨関節の病変の外，軟部組織への炎症の波及の検出も可能であった．核医学検査のみで　全身の病変の検出から治療効果の判定までカバーでき，ＣＴなどの他の検査は通常不要で　極めて有用であった．

340 先天性心疾患術後における感染性心内膜炎に対するGallium-67イメージング

木幡　達，小野安生，神谷哲郎（国立循環器病センター小児科）　西村恒彦，高宮　誠（同 放射線科）
八木原俊克（同 心臓血管外科）

先天性心疾患術後例で，感染性心内膜炎(IE)を疑われた13例に対し，Ga-67イメージングを施行した。このうち５例においてGa-67の異常集積が認められた。５例中３例では，三尖弁や右室流出路に見られたvegetationの遊離によると思われる肺梗塞部へのGa-67の集積を認め，他の２例では肺動脈再建に用いた人工血管への集積を認めた。経過を観察できた症例では，臨床症状の改善に伴いGa-67の異常集積は改善もしくは消失した。

Ga-67イメージングは，先天性心疾患術後のIEにみられた右心系のvegetationの遊離による肺塞栓や人工血管への感染の診断に有用であった。

341 抗肺癌ヒトモノクローナル抗体のヌードマウス移植ヒト肺癌への集積

松山誠孝、玉城成夫、花田和紀（大正製薬）　橋爪秀一、佐藤進（森永生科研）　村上浩紀（九大・農学部）
中野敬子、日下部きよ子（東京女子医大・放射線科）

肺大細胞癌患者のリンパ球由来ハイブリドーマが産生する抗肺癌ヒトモノクローナル抗体ＨＢ４Ｃ５を用い、ヒト扁平上皮癌ＬＣ６を移植したヌードマウスにおける癌集積性を検討した。^{125}Ｉ標識抗体を担癌ヌードマウスに投与し、癌及び正常組織におけるアイソトープ量の経時変化を見た。その結果、癌／血液比で５倍、投与後５日目の癌壊死部では１９倍の集積が見られた。更にガンマシンチカメラによるイメージング、及びマクロオートラジオグラムにおいて同様に本抗体の癌集積性を認めた。以上より、ヒト型抗体である本抗体は癌の体内診断薬、治療薬として応用可能であると思われる。

Presented by Medical*Online